

差延を営む「シンタックス職人」

——意味論的差延における諸条件について——

立花 史

はじめに

1980年代以降のいわゆる「政治的転回」以降とりわけ質・量ともに豊富なジャック・デリダの仕事は、たとえそれ以前の著作、例えば「暴力と形而上学」などの中にその萌芽が十二分に垣間見られていたにせよ、彼の哲学を倫理や政治の観点から様々に論じる可能性を決定的に開いたと言えよう。こうした側面については今後も研究が積み重ねられる必要がある。しかしその一方で、記号論的デリダや文芸批評的デリダというイメージが後景に退いてゆくにつれて、言語学や記号論と対決していた初期デリダの言語論的地平への関心自体が薄れていった観がある。存在論的地平を考慮しない初期デリダの読解には実際、限界があったわけだが、しかし今日、初期の営みを再考するのは無意味ではないであろう。なぜなら、デリダが言語について語ったさまざまな差延（意味、署名、言語や翻訳）にどのような関連性があるのか、そしてそれが、存在論的地平や認識論的地平とどのように交差するのか、そうした問題に関してはいまだ十分な研究がなされていないからである^①。そこで我々としては、その死によっていよいよ本格的な研究対象となってきつつあるデリダの著作において、いまだ翻訳が待たれるDI所収の「二重の会」を含め、意味論的地平での差延に関するデリダの諸論文を追いながら、この差延の条件性や様態を分析し、その帰結として、他の差延との関係、他の地平との関係を可能な範囲で提示したい。

(1) 差延の種々相

De la grammatologie において、あらゆる記号一般は「設定された痕跡 *trace instituée* の審級 (p.68)」を内包していると述べられている。これはソシュールの言うような記号の恣意性のことではない。記号の恣意性が前提とする自然と制度という二項対立を疑義に呈するために、痕跡が論じられているからだ。デリダがほぼ差延と同義で用いる痕跡とは何か。その種々相をまず素描してみよう。

設定された痕跡について、「そこにおいて、差異がそのものとして立ち現れることで充実した諸項の間の変動の自由が可能になるような、そういう回付構造の中に見られる差異の引き留め (*rétenion*) を考えることなしには、設定された痕跡を考えることはできない」(p.68) と言われているが、この「引き留め」が現象学でいう過去把持をも意味することから時間的地平が考慮されているように見える。そのことは、直後で、「別の今—この不在」や「痕跡の現前における還元不可能な不在」(p.68) が言われていることから明白であろう。VPにおける内的時間意識の議論に引き寄せて言えば、デリダにとって、絶対的に特異な出来事は意識に対して現前せず、出来事を現前として生き生きと感じられるためには、その出来事の運動を差異付ける最小単位の時間的推移の間を、同時的なものとして把握し引き留めて出来事の特異性を失わせて痕跡にする作用が常に生じなければならない。現前性を引き留めるのではなく、この引き留めによって初めて出来事が現前という形で生き生きとして意識に現れるのである。デリダが過去把持ないしは過去把持的痕跡を重視するのは、こうした事情のためである。パロールにせよ、エクリチュールにせよ、記号が記号として意識に認知されるためには、この引き留めによる固定や設定、出来事性からの「隔たり」が必要となる。「設定された痕跡」とは、設定された側面を強調した痕跡のことであろう (同じ箇所設定の人工的含意が疑義に付されている)。差延は時間的なのである。

ところで、VPの試みは、過去把持的痕跡の中に独特な運動を見出す、ということであるより寧ろ、より一般化された痕跡の運動の側から過去把持を考察した点にある。その時もはや、意識があつて出来事を認識するのではなく、意

識の自己現前も出来事の出現をも可能にし、いかなる出来事や特異性にも先行されない存在論的な局面での運動が問題になってくるのであり、デリダはそれを、「差延」というテキストで明快に定式化している。

諸々の過去把持や予持（ここで、類推的かつ暫定的に、現象学的かつ超越論的な語法を反復するならの話だが——とはいえこうした語法の不適切さは、後に露になるだろう）といったものの標記や痕跡の総合、つまり根源的で、還元不可能なまでに非単一な、従って厳密な意味で非原初的な総合としての現在の構成を、それこそを、私は原＝エクリチュール、原＝痕跡、ないし差延と呼ぶことを提案しているのである。（MP, p.14）

運動としての原＝痕跡は、また時間を構成する最小単位の「待機」であり、差異を刻む遅延（つまり差延）であり、換言すれば、時間の運動の核心で生じている空間化＝疎隔化（*espacement*）である⁽³⁾。通常の意味でのパロールやエクリチュールが、現在における現前を前提とする以上、両者は原＝エクリチュールを前提にせざるをえない。またそれが、「形而上学が「無生物」として規定したものから、動物的な有機組織のあらゆる水準を通じて、さらに意識にいたるまで（p.69）」のあらゆる存在者の現前とその歴史において、そのつど権利上先行してきた、とされるのも頷ける。差延はまずもって存在論的である。差延や痕跡が現在の構成であり現前者を出現可能にするということは、痕跡自体は現前しないということである。ただしそれは、痕跡が単に現前しないということではない。痕跡は現前性の場を切り開き、現前者を出現可能にする運動であるがゆえに、自らは現前性の地平には存しないのである。現前性と痕跡のこの関係は重要である。デリダは、ハイデガーの『アナクシマン드로スの箴言』から存在忘却をめぐる一節を引いた少し後で、「差延」というテキストの中で次のように続けている。

痕跡は（…）おのれを解体し、おのれの位置をずらし、おのれを差し向けるような、的確に言って生起しないような、そういう現前性の見せかけであるのだから、消去は痕跡の構造に属している。（…）ここで言われる消去は、そもそものはじめから痕跡を痕跡として構成するのであり、痕跡を場所の変化としてしつつえ、痕跡の出

現において痕跡を消失させ、痕跡の定立において痕跡をおのれの外へ出させるのである。(…) 現前者は、或る一般化された回付 (renvoi) の構造における一つの機能となる。現前者は、痕跡であり、痕跡の抹消の痕跡である。(MP, p.25)

痕跡は現前しない運動である以上、それは現前者を出現可能にすると同時に常に既にそれを痕跡にしてしまっている。権利上、現前者はそれ自体として屹立しえず、痕跡の運動に押し流され、常に他者へ将来へと開かれている。この構造が、シニフィアンの恣意的な回付を記号論や言語学の枠を超えて拡張し、「一般化された回付の構造」と呼ばれているのである。痕跡とその抹消とを伴う差延の回付構造は、ハイデガーでいう存在の開けにおける存在者の充溢と存在の運動の退隠との二重性とパラレルであることは見て取れる⁴⁾。

ここで、さらに重要な側面が痕跡にはある。GRにおいて特に強調され、言語論において不可欠な側面なのだが、痕跡は、あらゆる差異を標記する運動でもある、という点である。無論、諸差異の切れ目が痕跡だというのではない。痕跡の運動が現前性を可能にする限りにおいて、差異の設定が可能な地平を切り開くのである。従って、痕跡とは、所与の空間を切り刻む痕跡であるというより、まずもって切り刻み自体を可能にする運動であり、存在の運動が開けを開示するが如く、空間性そのものの産出とさえ言える⁵⁾。痕跡や差延が空間化あるいは疎隔化と呼ばれるのはこのためである。と同時に、こうした地平において、現前者の出現に先行して、つねに差異が設定され、諸単位が確定される。諸単位が一定の形式として確定されるのである。痕跡は、「形式の形成作用 (GR, p.92)」、「二重の会」の言葉で言うならば「形式化の力 (DI, p.274)」、ニュアンスを補って換言すれば、形式を常に形成しなおす運動であり、そうした力だということになる⁶⁾。この運動によって形式が常にずれを孕みながらおのれの同一性を現前させる。これが反覆可能性である。重要な側面と言ったのは、痕跡の抹消の痕跡と表裏一体である形式の形成は、単に不可避であるかぎりか、不可欠でさえあるからである。常に現前者に摩り替わるにせよ、この形式の形成作用を前提にして初めて、我々の認識や言語活動が可能になるのである。では、差延のこうした種々相を基に、デリダは言語的差延をどのように記述しているのだろうか。

(2) 存在の意味論

実は、デリダは、言語そのものを対象として論じたことは殆どない。言語そのものという捉え方がそもそもデリダ的ではない、というのもあるだろう。デリダは常に差延から出発して、他の領域へと開かれた仕方と言語活動の個々の側面（形式的側面、意味論的側面、翻訳的側面、言語使用の側面）を記述している。例えばGRにおいては、恣意性の観点からラディカルな言語学を確立しながらも、エクリチュールを排除したソシユールの身振り（デリダの解釈の是非はここでは問わない）を脱構築し、形式の形成という根源的な恣意性にまで立ち戻って言語を考察し、原＝エクリチュールの地平の重要性を主張している。比較的まとまった「署名、出来事、コンテキスト」（MP所収）も、話し言葉、書き言葉、「経験」の全体（MP, p.378）、署名のそれぞれに見出される反復可能性の構造を記述しているが、これも「標記（marque）における現前性の破碎としての疎隔化」という「一般的空間」（ともにMP, p.390）から言語や経験を捉え直している。翻訳や言語使用の議論が大抵の場合一言語を一つの単位として考察し、署名や言語形式の議論が形式一般に拡張されがちであることを考えると、差延の観点から扱われる言語的事象は主にその意味論的側面に集約されているように見える（語の翻訳にかかわる差延もこの地平からしか考察しえない）。実際、「署名、出来事、コンテキスト」では、言語行為が対象となる以上、コミュニケーションの地平や意味論的地平に即して議論が進展する（MP, p.376）。それは、「クヴァル・クヴェレ」や「白けた神話」（ともにMP所収）や「隠喩の引退」（PS1所収）で展開されるメタファーの議論ともつながっている。「署名、出来事、コンテキスト」において、言語と経験が横断的に論じられているように、名詞や名詞化可能なものに特化した言語論は、現前者の現前という局面と合わせて差延の運動を記述する場合に便利だということもある。両者は、ともに（再）現前化の作用として理解可能だからである。指示の対象が常に痕跡であり痕跡の抹消の痕跡であるという事態は、デリダ自身の原暴力論にもかかわってくる。この点に関して、ブランショが持論に関連付けて引用する「アダムが動物たちを支配した最初の行為は、彼らに名前を押し付けるこ

とであった。言い換えれば、アダムは、(現実存在するかぎりでの)動物たちを、彼らの現実存在において、絶滅させたのである。」⁹という存在論的名指しの局面も、ブランショとデリダの親交を考えれば、デリダの言語論にはほぼ当てはまるように見える。しかし実際にはどうなのだろうか。我々はこちらで、二つの点を問うてみたい。まず、意味論的地平における差延は、他の地平での差延と比べて条件性においても並行的と言えるのだろうか、次いで、意味論的地平における差延は、存在論的な名づけの場面で想定されうような名辞の濫用(catachrétique)的運動(PS1, p.81)として捉えることで十分なのだろうか。我々が後に扱うテキスト「二重の会」はこうした問題の具体相と限界を考察するのに非常に重要な役割を担うことになるだろう。

デリダは、GRと「繫辞の代補」(MP所収)の中で、ハイデガーの「存在」という語の取り扱いについて論じている。「繫辞の代補」において、『思考のカテゴリーと言語のカテゴリー』のバンヴェニストは、古代ギリシャ哲学の構造が当時のギリシャ語の言語構造の反映であり、とりわけ他の言語には必ずしも存在しない「ある」という動詞の存在から形而上学の局所性を演繹しようとしているとされている(デリダの解釈の是非はここでは問わない)。対して、「ある」の意味が存在しないならばそもそも言語は全く存在しえないとする『形而上学入門』のハイデガーを引き合いに出しながら、デリダは、「ハイデガーは言語が言語であることの条件として、もはやその言語のなかに「ある」という語もしくは概念(シニフィエ)が現前することを考えているのではなく、或る別の可能性が現前することを考えている」と指摘する。だが、「もっとも、この別の可能性はまだこれから規定されねばならないが」(ともにMP, p.239)と補足しながらも、この論文自体は、言語学者と哲学者に共通の難点を指摘して終わってしまっている。「別の可能性」とは何なのか。この点をもう少し掘り下げているのは、寧ろGRの方である。

GRの記述を追ってみよう。ハイデガーは、『形而上学入門』以降、存在論の企てとその語を放棄し、存在は、脱底であるような根拠としてしか現出せず、その現出はつねに言葉として、ロゴスとして与えられるとされ、そうであるがゆえに、ハイデガーは、デリダの言葉に従えば、「西欧の哲学と言語学の領域

の内部で一般的な統辞論的、語彙論的形態のもとに固定されているような「存在」は、原初的で絶対的に還元不可能な「シニフィエ」ではない」し、「また「存在」は、未だなお言語体系の中に、そして限定された歴史的な「意義作用 (signifiante)」(…)の中に根を張っている」(GR, p.37)ということがしばしば指摘されている。「繫辞の代補」と同じく、直説法現在三人称単数estや不定法の特権も引用される。ともあれ、デリダによれば、こうしたロゴスの問題を重視するがゆえに、ハイデガーは、西欧形而上学における或る言語形式の支配の根源を問い、さらには『存在の問いへ』の中では、「存在」という語に×印を付するに至ったということになる。この×印において「記号の観念そのものが、見るべきものとして自らを与えながら、自らを破壊する」ことになるのだから、これは、「最後のエクリチュール」であると同時にまた「最初のエクリチュール」でもある、とデリダは主張する。従って、存在の意味は、超越論的な、ないしは超時代的なシニフィエではなく、「ある特定の意義作用する痕跡」(GR, p.38)であり、ハイデガーの記述する存在の意味論が、つねにすでにロゴスの中で行われた以上、それは、エクリチュールに沿って一般的に定式化された差延の運動の限定的なパターンなのだ、ということになる (GR, p.38-39)。存在論的差異が差延にとって二次的たらざるをえないのはこうした事情による。

以上の展開をみると、「繫辞の代補」で暗示にとどまった「別の可能性」とは、存在の運動を痕跡一般にまで拡張する思索の可能性とみてまず間違いないだろう。ただし、重要なのは、むしろ、この可能性を展開できなかったハイデガーへの苦言に当たる部分である（「繫辞の代補」では、『形而上学入門』の語源学に定位して批判がなされている）。まず、デリダは、ハイデガーが特定の言語形式の支配に自覚的でありながらも、語源へ遡ることで存在の意味に迫ろうとしてしまっているがゆえに、存在の問いを、「“存在”の意味的充実の再我有化」や「失われた根源の再活性化」に限定してしまっていると批判している。また、そうであるがゆえに、「たとえ繫辞の代補は構造的に必然的なものとみなされているとしても、そのような挙措は繫辞の代補を歴史的な偶発事たらしめてしまうのではないか」(MP, p.244)という疑念を呈している。デリダは、こうした事態を、哲学者と言語学者に共通の、意味論的なものの特権化とし、

論文の末尾で次のように問うている。

語に関して事情はどうなっているのか。そして、語彙的なもの（意味論的なもの、語源的なもの）と文法的なものとのこの対立、そのものとして問われることなく、このように彼ら二人の言説を支配しているこの対立に関して、事情はどうなっているのか。どこにおいて、どのように、この対立は構成されるのか。（…） 繫辞の代補の中には何が残っているのか。（MP, p.246）

ここに、GRで明示的に論じられている痕跡やエクリチュールの議論を見出すのはたやすい。しかし肝要なのは、ハイデガーが、語彙的なものと文法的なものとの絡み合いを十分に思考しえなかったことを批判しているということ、逆に言うと、言語的地平での差延が、そうした絡み合いとして記述されているということである。実際、この絡み合いの核となっている繫辞の代補は、構造的必然性であれ、「ある」の語彙的な意味を外部から事後的に襲うものではなく、むしろ言語の内に、そもそもの初めから宿っている「或る根源的な可能性」なのだ。デリダが、バンヴェニストとともに、繫辞の代補の端的な例として、繫辞の機能が、「疎隔化の空白、いわば消去された句読点、或る休止」によってのみ示される事例を引いているが、繫辞を記すものの語彙的不在を「不在そのもの」（MP, p.241）とデリダが語るとき、彼は、語彙的不在の中に、繫辞の機能そのものを穿つ根源的な不在の運動を仄めかしている。

こうしてみると、意味論の単位の反覆可能性を主張していたデリダが、まったく同時進行で名詞の特権性を相対化する議論を行ってきたことがわかる。1978年発表の「隠喩の引退」の中で彼は、リクルの誤解を訂しながら、自分は名詞や単語の特権性を一貫してしつこく検討してきたのであり、「こうした優位に対して、私はシンタックスのモチーフを対比させることを常としてきたが、このモチーフは「白けた神話」において主要なものである」（PS1, p.73）と語っている。事実、「白けた神話」では、最後の数ページ（MP, p.317-323）が、隠喩の複数性とシンタックスの問題に割かれている。その記述を少し辿ってみよう。隠喩的なものは、主題の現前に尽きないテキストを生み出す。デリダに拠ると、隠喩的なものはシンタックスを縮減するのではなくそこに自

らの隔たりを配置することで自己超出する。隠喩的なものが自分自身でありうるのは、自らを抹消することによってのみである。こうした隠喩的なものは、自己解体的性格ゆえに、そもそものはじめから複数的なのである。ここから二つの道筋が出てくる。一つは、意味の還元不可能な喪失をどこかにまずもって含んでいる統辞論的なものにおいて生ずる隠喩的なものの散種に対抗する道筋である。その場合、隠喩の分散する意味素を取りまとめ、生きた隠喩の総合を目指す。隠喩を排除するのではなく、それによって脅かされるものと共犯関係にあるがゆえに、隠喩が必要とされ、それを主題や本義の下に従属させる。これは、意味の目的論的な降臨（parousie）に行き着くような隠喩の一般化であり、デリダが批判する意味での形而上学の道筋に当たる。他方で、もう一方の道筋の場合、隠喩の自己解体は、最初の道筋を横断しつつも、「統辞論的抵抗の代補、つまり意味論的なものと統辞論的なものとの対立を、そしてとりわけ後者を前者に従属させる哲学的ヒエラルキーを失敗に導くもの全て」（MP, p.323）のものである。この道筋もまた一般化という形をとるが、今度の場合は何らかの哲学素を引き伸ばして確認する、という意味での一般化ではなく、その属性や所有地の境界を除去し、つまり本義と転義の境界を越えてゆく一般化である。

以上のように、「白けた神話」に拠れば、意味論的単位はそれが単独で一般化するのではなく、「シンタクスの抵抗の代補」によって可能になるものだということがわかる。しかし一体この代補とは具体的にどのような事態なのだろうか。我々はようやくここで「二重の会」の分析に取り掛かることができる。

（３）意味論的な乏しさ

二つのセッションを含む「二重の会」の内、その第一セッションは、主にマラルメの散文詩「マイム劇」« Mimique »におけるミメーシスの問題を巡って展開する。「(…) 欲望と成就の、犯罪遂行とその追憶との間 (entre) の婚姻 (hymen) において。ここでは先取りし、あそこでは追想しつつ、未来形で、過去形で、現在時の偽りの外見の下に。」という一節ひとつをとってみてもわ

かる通り、時間の差延を論じるのについてつけのテキストといえる⁹⁾。デリダは、差延あるいは疎隔化における同一性としての持続、あるいは一般化し他者へ回付する構造としての間隔 (intervalle) を、このテキストのhymenなる語に読み込む、というよりむしろ、デリダなら、hymen自体が、そのような読解の可能性を常に既に原理的に担った標記なのだ、と主張するだろう。hymenという語が、結婚の神ヒュメナイオスに由来する「婚姻」の意味と、解剖学用語での「処女膜」の意味との、開けの意味と閉じの意味との奇妙な兼用法 (syllepse) を持つという事実は、この読みに不気味な説得力を与えている。ただしこの語を、デリダが読解上用いる操作概念のように受け取るとすれば、この論文の企てを中和化することになってしまうだろう。なぜなら、語に固有の意味の特権化こそがこのテキスト読解において焦点となっているからだ。デリダは、この散文詩の記述する絶対過去性や、hymenが持つ意味の「決定不可能性」を論じた後、突如、「我々が抱く文献学や語源学への関心は付随的なものにすぎない」と断定し、次のように続ける。

hymenの効果が生み出されるのは、第一にentreを配置するシンタックスによってであり、宙づりがもはや語の位置だけに由来し、語の内容には由来しないようにentreを配置するシンタックスによってである。hymenによって、我々はentreという語の位置がすでに標記しているものを再標記するだけであり、たとえhymenが現れなくともこの語の位置が標記しているであろうものを、再標記するだけである。hymenが「結婚」または「犯罪」、「同一」または「差異」などによって置き換えられるとしても、効果は同じであろう。それゆえ (…) entreから出発してhymenを規定しなければならぬのであって、その逆ではない。テキストにおけるhymen (犯罪、性行為、近親相姦、自殺、模造) は、この不決定の切っ先によって記入される。この切っ先は、意味論的なものに対する統辞論的なものの還元不可能な過剰に従って進行する。entreという語は、それ自体では如何なる十全な意味も持たない。開かれたentreは、統辞論的な楔であり、自足的名辞 (catégorème) ではなく共陳述辞 (syncatégorème) であり、中世からフッサールの『論理学研究』まで、哲学者たちが不完全な意味作用と呼んでいるものである。hymenに当てはまるものは、必要な変更を加えれば、パルマコンや代補や差延や何らかの他のものののように、二重で相反する決定不可能な価値をもつあらゆる記号に当てはまる。(…) シンタックスによる或る記号の構成や解体は、内部か外部かという二者択一を無効にする。我々が

相手にしているのは、単に、大なり小なり稼動中の統辞論的諸単位や凝縮のエコノミー的差異であるにすぎない。(DI, p.272)

引用を読めば、デリダの主張が、意味論的なものと統辞論的なものとの対立を単に相対化するといったことではないのがよくわかる。意味論的単位が反覆可能なものであるとするなら、意味を反覆させる契機はシンタックスである。意味論的地平の差延とは、つねに、語の意味というよりシンタックスの配置というコードの効果によるのであり、これは、『形而上学入門』のハイデガーの語源学的アプローチが未だ片足を突っ込んでいた解釈学的な多義性と鋭い対立をなす。多義性が、決定された諸単位による意味論的な豊穡さを意味するのに対し、hymenは寧ろそれが統辞論的な効果であるかぎりにおいて、意味論的な「ある種の乏しさ(DI, p.307)」なのである。これは、そのつど齎される統辞論的な組み合わせというコンテキストによって絶えず意味論的単位が一般化され解体されると同時に再構成される、そうした運動であることを意味する。だからこそ、語群は、このとき、意味論的単位であるよりも、シンタックスの一要素つまり「稼動中の統辞論的単位」でさえあることになる⁽⁴⁰⁾。この「稼動中」という部分がとりわけ重要である。ある名詞が統辞論的単位となるのは、まさにそれが文の要素として機能しているときだけであり、またそのときのみ、そのシンタックスの効果として、シンタックスにおける位置として、意味論的単位も再標記されるからである。意味論的単位と統辞論的単位は「稼動中」にのみ成立するのであり、そのとき意味論的単位が差異化されて反覆される。シンタックスにおける位置の痕跡として反覆され、語の意味として語に付着する。これが再標記である。

しかし同時に、シンタックスによる一般化が新たに始まることが可能であるためには、さまざまな意味（シンタックスという意味も含めて）を再標記された諸単位が常に既に存在していなければならない。その端的な例としてデリダは共陳述辞の事例を挙げている。共陳述辞という専ら統辞論的機能とされていたentreも、その機能とともに、まさにその統辞論的な位置によって、共陳述辞の「意味論的空虚」を再標記されて、空虚という意味を帯びざるをえないのである。デリダ自身が、スピノザの『ヘブライ文法要綱』から、entreを複数形

にしたヘブライ語の例を指摘しているように (DI, p.274)。このentreは、意味論空虚の再標記によって、シンタックスの可能性そのものを意味として持つようになる。だからこそ、この語は、「純粹に統辞論的なものでもなく、純粹に意味論的なものでもなく、この対立そのものの明確な開始を標記する」と言われることになる⁽¹¹⁾。このように、一般化と(再)標記という二重の運動の後に初めて、意味論的なものと統辞論的なものの対立がようやく現れる。この二重性が、意味論的地平における差延の正体なのである (つまり一般化と再標記の二重性と後者の実体化が、冒頭の差延の種々相において述べた、痕跡とその抹消の痕跡との二重性とパラレルであることは明らかであろう)。

では、この差延の観点からすると、語義の決定不可能性とは何なのだろうか。引用の直後に次のように続いている。「たとえその二重の価値が言わば「内的」なもので、両立不可能な二つの意味を同じ一つのくびき (...) の下に分節し結合させるにせよ、あるいはその価値が「外的」なものであり、人が語を作動させるコードに依存するにせよ。その二重の価値は常にシンタックスに由来している」(p.272)。つまり或る語が、文脈によってニュアンスを変える場合にせよ、語が元から相反する意味を持つような場合にせよ、大差はない。なぜなら、すでに我々が確認したように、意味論的単位そのものがそもそもの初めから統辞論的位置の再標記にすぎないのであってみれば、件の「内的」も「外的」も標記の度合いの差にすぎないからである。ところで、普段の発話においても、シンタックスを組み立てるたびに再標記は生じており、意味論的単位は差異を巻き込みつつ反覆される。巻き込まれた差異がやがて一定の段階に達すると別の意味として語に付着する。しかしながら、「意味論的なものに対する統辞論的なものの還元不可能な過剰」が生じる場合は、語に意味が再標記されるにせよその再標記が一つに定まらない⁽¹²⁾。これによって、決定不可能性は、使用のたびに漸進的に生じるはずの隔たりをたった一度の使用によって一気に呈示してしまう、そういう効果をもっている。つまりデリダが意味の相反する決定不可能な二重性に注目するのは、曖昧さや多義性といったものを肯定するためでは決してなく、寧ろそれがまずもって差延の運動の二重性を範例的に標記しているからであり、またその二重性が、実際のテキストの中で、範例的にこの運動を例証するからである。実際、彼は述べている。「代補性は、ここでは、一

見そう見えるように、従ってルソーの場合のように、外部に転落して、発話の生と熱気を空間において喪失する一辺倒（*unilatéral*）な運動ではなく、シニフィアンの過剰こそが、内部において、空間を代補し開始を反復する。書物はもはや空間化の修復ではなくその反復（…）である」（DI, p.287）。複数の意味論的単位の間の決定不可能性⁽¹³⁾は、こうして時系列的に生じうる空間化を、シンタックスの効果による意味の多重性によって重複し反復するのである。ただし、マラルメのテキストが分析の対象に選ばれているのは、単に、彼のテキストが「範例的」（DI, p.238）⁽¹⁴⁾だというだけで、意味論的地平での差延があらゆるテキストで稼動している運動であることは言わずもがなである。それは、「エクリチュールがこの決定不可能性を標記し再標記する時、エクリチュールの形式化の力は、たとえそれが「文学的」に見えようと、自然言語に外見上従属していようと、（…）論理＝数学的形式の命題のもつ形式化の力よりも強力である」（DI, p.274）という発言において、形式化の力の程度問題として語られていることから明らかであろう。

さらに、次のようにも考える必要がある。つまり、一方で、自足の名辞にせよ、共陳述辞にせよ、あらゆる語は、そのつど統辞論の一般化を被り、そのつど意味論的な形式を再標記される。ただしこのことは、意味とシンタックスとの区別を無効にするのではなく、むしろ反覆可能な仕方で再認し再構成することである。次に、語において一定の意味の形式が生起するということは、同時に形式同士の諸差異の設定でもある——つまりそれがシンタックスそのものののだが——ので、そこでは語同士が地と図のように代替可能な関係⁽¹⁵⁾をなし、各々の語がそれぞれ互いに他の語の統辞論的コンテキストを構成する。他方で、意味論的再標記を施されうる統辞論的単位の大きさは、権利上は無際限である。一語、一節、一文、文の固まりからさらに様々な全体性に至るまで、そのつど自らのコンテキストにおいて意味論的空虚を再標記される可能性に晒されていることになる。この統辞論的単位は、隣接する統辞論的単位や上位の統辞全体との関係で再標記されうることだろう。そして、こうした全般的な再標記の遡及的效果として、一言語の固有性と限界とが立ち現れてくることになる。たとえその限界が、常に痕跡の効果として差延されるにせよ。たとえその固有性が常に一言語の中の多言語性によって標記されているにせよ。

結論に代えて

さて、極めて駆け足に辿った道のりの到達点を、もう一度整理してみよう。我々が明らかにしたのは、隠喩や行為遂行的言語に即して、意味論的差延を考察される場合、その差延は第一の条件としてシンタックスの作用によって規定されている、ということ、つまり、シンタックスと意味の狭間で生じるのであって、ブランショにおける存在論的名指しのように、言語以前の名指される何かと名称言語の間に生じるのではない、ということである。デリダを読むものにとって、或る意味では何のひねりもない指摘かもしれない。確かに、「白けた神話」においてははっきりと「シンタックスの抵抗の代補」が語られていたし、「署名、出来事、コンテキスト」においても、コード一般を取り上げて、「抹消と差異の格子、反覆可能性をもった諸単位の格子、すなわち、諸単位の同一性を構成する反覆可能性自体が、決して諸単位をして自己同一性を備えた単位となることを可能にしないかぎりにおいて、諸単位自身の内的あるいは外的コンテキストから、そして自分自身からも分離可能な諸単位からなる、そうした格子」(MP, p.378)と呼ばれており、この「内的コンテキスト」にシンタックスが入るのは当然である。しかし前者からはシンタックスによる一般化が具体的には論じられていなかったし、後者においては、「もっとも、このコードという概念は私には確かなものとは思われないので、ここではこの概念にあまり関わり合わないことにする。」(ibid)と断って、その後は、要素の反覆可能性の議論に限定されてしまっている。それに対して「二重の会」においては、マラルメという特殊なテキストを対象に据えていることもあって、entreという共陳述辞の例も出しながら、例外的なまでにシンタックスの機能に言及しているのである。それだけではない。デリダがentreを問題にしたのは、マラルメのテキストの読解におけるhymenの決定不可能性を論じるためであった。意味論的地平においては、hymenの兼用法の決定不可能性が差延をなしていない点是指摘したが、しかし意味論的差延の条件であるシンタックスの過剰さに注目した「二重の会」の議論は、文学作品の脱構築的読解が、意味論的地平での脱構築を前提にしたものであることを改めて理解させてくれる。「二重の会」

において、テキストの一枚岩的現前性⁽¹⁷⁾の脱構築と意味論的単位の脱構築が交差しているのである⁽¹⁸⁾。「二重の会」の主要な議論の一つがテーマティック批評の批判であることを考えれば、この交差は至極当然であろう。また、意味の地平における一般化と再標記という二重の運動は、テキストという形式の再標記だけでなく、一言語という形式の再標記をも可能にしていることは述べた。このことは言語の中に二つ以上の言語が存するというデリダ流の翻訳の問題への糸口になると思われる。ところで、「署名、出来事、コンテキスト」というテキストに戻って最後にもう一つ指摘しておきたいのだが、デリダがこの論文においてコードという概念を取り下げたのには理由があると思われる。この論文は、話し言葉や書き言葉だけでなく経験の総体をも視野に入れて反覆可能性を論じているので、論文の主旨から逸れた、経験のコードについての煩瑣な議論を避けたかったのであろう。デリダの議論において、意味論的差延における統辞論的条件の特殊性は、存在論的差延の局面との関係を語る上で、しばしば困難に直面しているように見える（逆に言うと、デリダの言語論をブランショのそれと重ね合わせることのまずさは、存在論的名指しに留まって、こうした困難を回避してしまうことにある）。なるほど、「形式と意義作用」においてなされたように、êtreの直説法現在を、形式性一般の明証性と考え、「存在の意味は形式の負荷によって制限されてきた」（MP, p.206）と言うことはできよう（「隠喩の引退」では「存在の繫辞」（PS1, p.90）と言われている）。しかしこれは、存在も、意義作用としての意味も、現前性という一点で絡み合っているという以上のことを言い得てはいない。また、「白けた神話」におけるように、隠喩というロゴスの運動の中に、現れないものを現せしめると同時に隠すというピュシスと同じ二重の運動（MP, p.288, p.316）を見るだけでも、同じ意味で不十分であろう⁽¹⁹⁾。意味論的差延が、存在論的名指しとは別の形で存在論的地平と交差するとすれば、それは具体的にどのように記述しうるのか。こうした難問をその後のデリダはどのように扱っていったのか。それを我々は論究していかねばなるまい。

注

- (1) 但し、この点に関しては次の論文が注目に値する。藤本一勇、「四つの差延と脱構築の正義」、『脱構築のポリティクス』（叢書アレテイア1）、東京、御茶の水書房、2003年、p.33-62。差延を暫定的に四つの地平に区分するという行為は一見暴力的に見えるかもしれないが、差延が一つの地平に還元されてしまうことを防ぎ、地平間での差延の関係を考える上で非常に参考になる。加えて、この論文は、差延の運動を三つの暴力から分析した意味でも興味深い。なお、我々は本稿において「言語的差延」という言葉を用いるつもりだが、これは藤本氏の論文に負っている部分はあるにせよ、単に言語的地平で問題となっている差延という意味で理解されたい。
- (2) 作品名は次のように略記する。GR=*De la Grammatologie, Collection Critique*, Paris, Éditions de Minuit, 1967、VP=*La voix et le phénomène: Introduction au problème du signe dans la phénoménologie de Husserl*, Paris, PUF, 1967、MP=*Marges de la philosophie*, Paris, Éditions de Minuit, 1972、PS1=*Psyché: Invention de l'autre* (nouvelle édition augmentée), Paris, Éditions Galilée, 1998。ED=*L'Écriture et la différence*, Paris, Éditions du Seuil, 1979, (points Essais)。DI=*La Dissémination*, Paris, Éditions du Seuil, 1993, (Points Essais)。尚、ED とDIの初版年はそれぞれ1967、1972だが、本稿の執筆に当たっては文庫版を参照した。収録論文の題名は適宜和訳して表記する。
- (3) デリダが差延を厳密に規定するとき、必ず存在論的地平でなされていることを軽視してはならない。なるほど差延は、存在論的差異に限定されないという意味ではこの差異より一般的であるが、しかし「いかなる絶対的単一性に先行されない根源的総合」(GR, p.91-92)としての厳密な意味での差延を考えるには、どうしても存在論的地平が不可欠なのである。
- (4) フランスにおけるハイデガー研究の泰斗ダスチュールは、『存在と時間』第65節の「根源的時間は有限である」というハイデガーのテーゼに関して次のように注釈している。「脱自的時間性は有限的時間性である。(…)ここでは、時間が含み持つものではなく、時熟の有限なあり方が重要である。時間性の根源的有限性のテーゼの意味は、現存在の投企として、つまりその将来が閉ざされ根拠が無である可能存在としてしか見えるものを与えないような根源的時間性の現象的特性を固定することにある」(F. Dastur, *Hedegger et la question du temps*, Paris, PUF, 1990, p.71-72)。デリダの「無限な差延は有限である」(VP, p.114)というテーゼは、上記の意味で受け取られるべきであろう。たとえハイデガーが後に地平と超越の概念を放棄し、DaseinがDa-seinに変わるにせよ、この点において事態はそれ

ほど大きく変わっていないと考えられるが、こうした問題の詳細は別稿に譲る。

- (5) 「新たな超越論的感性論なら、数学的な諸々の理念性によってだけでなく、記入一般の可能性によっても主導されるべきであろう。なお、記入一般は、既に構成された何らかの空間に偶発事のように襲い掛かるのではなく、空間の空間性を産出するのである。」(GR, p.410.)
- (6) デリダの形式概念には注意が必要である。形式は内容とワンセットになったものではなく、痕跡の運動によって、そのつど、まずもって実質や意味を欠いたものとして産出され（これが形式化と呼ばれる）次いでそれが抹消される（痕跡の抹消）ことで、意味や実質を想定された現前者となる。従って形式化ないし一般化とは、「無根拠化 (immotivation)」(GR, p.69) としての差延や痕跡の運動のことである。形式や制度の可能性の条件であると同時に不可能性の条件として、形式や制度をそのつど再形成し続ける作用としての差延の側面は、後には制度や法との関係で練り上げられ、*Devant la loi* (1984) では、「法の法 (la loi des lois)」、さらに *Force de loi* (1994) では、「正義」と呼ばれることになる。
- (7) M. Blanchot, « La littérature et le droit à la mort », *La part du feu*, Paris, Gallimard, 1949, p. 312.
- (8) 後者の一般化が (5) で示した一般化であることは言うまでもない。なお、己れの死を含みこんだこの一般化の中に、デリダが哲学の運動との類似性を見ていることは重要である (MP, p.323)。この差延的一般化は哲学の歴史の中にすでに書き込まれていたものだということである。この指摘と、「暴力と形而上学」(ED 所収)における「問いの共同体」(p.118)に関する一節を、晩年のデリダにおける遺産継承の主題と比較してみるならば、彼の主張の中に一貫性が見てとれる。とは言え、変節を徒に言い立てるのは論外であるにせよ、一貫性を確認するだけでも、デリダの思想の展開の貧しさを強調することになりかねない。その意味では積極的に非一貫性を見出してゆく必要があるようにも思われる。
- (9) マラルメ自身がポール・マルグリットの *Pierrot assassin de sa femme* を下敷きにしているだけに、ここに、後の « *Devant la Loi* », *Philosophy and Literature*, Édition A. Phillips Griffith, Cambridge, CUP, 1984.におけるフロイト読解のように、絶対的過去ないしは前未来の原暴力を読み取ることもできるが、ここではひとまずおいておく。
- (10) 従って「二重の会」で、「シンタクス職人 (« syntaxier », DI, p.222)」を自認するマラルメの書簡が引用されている時、エクリチュールの書き手としてのマラルメが、まさに統辞論的一般化に意識的な者であることをデリダが暗示しているのだと考えられる。
- (11) 共陳述辞の問題は、「白けた神話」においても、アリストテレスやフォンタニ

エの修辞学との関係で再論されることになる (MP, p.278-279)。

- (12) ここで、マラルメのエクリチュールにおけるêtreの忌避について触れておく。「繫辞の代補」で、バンヴェニストが、フランス語において、或る典型的な操作の中で動詞「ある」が欠落することを論じている論文を参照した後、デリダは、註の中で、この観点からマラルメのêtreの欠落を研究する方向性を指摘している (MP, p.239)。ただしこれは、デリダ自身の方向性とは異なる。「二重の会」で一度だけ、繫辞の問題に触れられているが、彼は、例えば、「実在についての判断」が不可能な「マイム劇」のテキストにおいて、この語が殆ど用いられていないことを、この語に現前者を定立する作用があるという考えから説明している。「こうして、マラルメは常にêtre動詞を省略すると指摘されてきた。この省略は、jeuという語の頻出と補完的である。マラルメのエクリチュールにおけるjeuの実際の使用は、êtreの忌避と共謀している。êtreの忌避は、文字通り、散種の中に、散種として印刷される。」 (DI, p. 266) つまり、繫辞の欠落によって統辞論的過剰が生じている中に、意味論的にも、実在を告げる語の欠如を配置しているということであろう。

- (13) 注意すべきは、「二重の会」のデリダが少なくとも三つの次元で決定不可能性を語っているということである。決定不可能性とは、我々が冒頭で示した「回付構造」のことであり、現前者は、痕跡の抹消の痕跡であるがゆえに、つまり痕跡との関係が根本的に無根拠であるがゆえに、常に現前の他者へと開かれているということである。こうした回付構造は、まず現前性の次元 (DI, p. 235, p. 254, p. 266) で言われ、ついでテキスト的な次元 (DI, p. 249, p. 260sq) で語られ、さらに意味論的な次元 (DI, p.307sq)でも言及されている。hymenの両義性に関して言うと、これは、テキスト的な次元で、その一枚岩的な現前を脱構築的に読み直す梃子になっているという意味で決定不可能ではあるが、意味論的にはそうなのではない (ちなみに、意味論的な回付構造は「散種」として第二セッションで論じられている)。なぜなら、この決定不可能性は、すでに決定された複数の意味論的単位の間での不決定なのであって、そのためには既に意味論的再標記の抹消が生じていなければならないからである。

- (14) 正確には次のように述べられている。「この標記の二重化は形式的な断絶であると同時に形式的な一般化でもあるが、この二重化の中でなら、マラルメのテキストが、そしてとりわけあなた方が目の当たりにしているその「紙片」が範例的なものとなるであろう (しかし当然、この最後の命題における各々の語は位置をずらされ、疑惑に見舞われているにちがいない)」。『範例的』と書いた直後にすかさずこの言葉に留保がつけられている点は重要である。デリダにとって、あらゆるテキストは、その特異性による再標記のために、権利上は範例的でありうる

(がゆえに、範例性という概念自体が脱構築されている)。彼の著作において、範例性という概念に留保を表明しているものは少なくないが、例えば次の箇所を参照されたい。Passions, Paris, Galilée, 1993, p. 42.

- (15) 少し角度は異なるが、以上の点は、存在論的差延には地と図の関係がないことと対照的ではないだろうか。Cf. 藤本一勇、「デリダにおける時間のアボリア」、『情況』1998年10月号、東京、情況出版、p. 142-163。
- (16) なお、デリダと直接の関係はないが、前田英樹は次のように語っている。「言語が世界にかかわるのは、単位の反復的自己産出という、いわば下降方向の運動とはちがった運動においてだろう。それらの単位が結合によって世界に侵入するやりかたは、上昇的と言ってもいい。ソシユールには、この上昇がいかに起こるのかわからない。(…)それは、上昇の運動が起こるその起点が、起点とは呼べない底なしの暗闇であることを知っているがためだ。(…)『^{ディダクシ}言述』を目的化する運動は、言語それじたいが自己産出する運動と根源的に分離している」(『沈黙するソシユール』、東京、書肆山田、1989年、p.268)。だが、このように「分離」してしまえば、意味論的単位の「反復的自己産出」を論じる契機を失ってしまわないだろうか。
- (17) これについては、Jacques Derrida, *Positions*, Paris, Editions de Minuit, 1972およびその邦訳(『ポジション』、東京、青土社、2002年)の訳注p.177-186参照。
- (18) その意味で、デリダがマラルメのテキストにおけるpliという語の動きを追いつながら、同時に単語pliの本義について論じつつ、次のように語っているのは象徴的である。「テキストの作業によって生み出された標記の代補は、テキストの外部に陥り、自立物のように、自分以外の起源をもたず、再び現前性(あるいは記号)となった痕跡であり、再我有化・再現前の欲望と不可分である。あるいはこの構造的な位置がそうした欲望を生み出し、そうした欲望から隔たりながらそれを保持するのだ」(DI, p. 315-316)。主題という概念を軸に、意味の現前性とテキストの現前性が同時に論じられている。
- (19) アリストテレスのミメシスを、対象を異郷化(dépayser)することで抽象し類比化する人間の認知的能力と読む点でデリダに近いロラン・ジュニーは、「フィギュラル(言説の現動性を条件づける感性的かつ意味論的なプロセス)」という概念を導入して意味の生成の局面を分析している。彼は、メルロ＝ポンティやデュフレノの現象学的詩学が、感覚の語彙を基盤とするアトミズムの域を出ていないことを指摘し、シンタクスを含めた様々な文法的な事象と感性的なものとの関係を記述しようと試みている。とりわけ興味深いのは、「フィギュラル」が、「言明的フィギュラル」「修辭的フィギュラル」「発話的フィギュラル」に区別され、内的な緊張の感覚的な差異が、それぞれ三つの地平でのシステム内の対立関係へと

変換される運動の重層性として、人間の言語活動を規定していることである。ジェニーの提案は、問題の解決の糸口より問題の困難さを浮き彫りにしている点で注目に値する。Cf. « Poétique et représentation », *Poétique* vol.58,1984 et *La parole singulière*, Paris, Belin, 1990, surtout p,73-85.